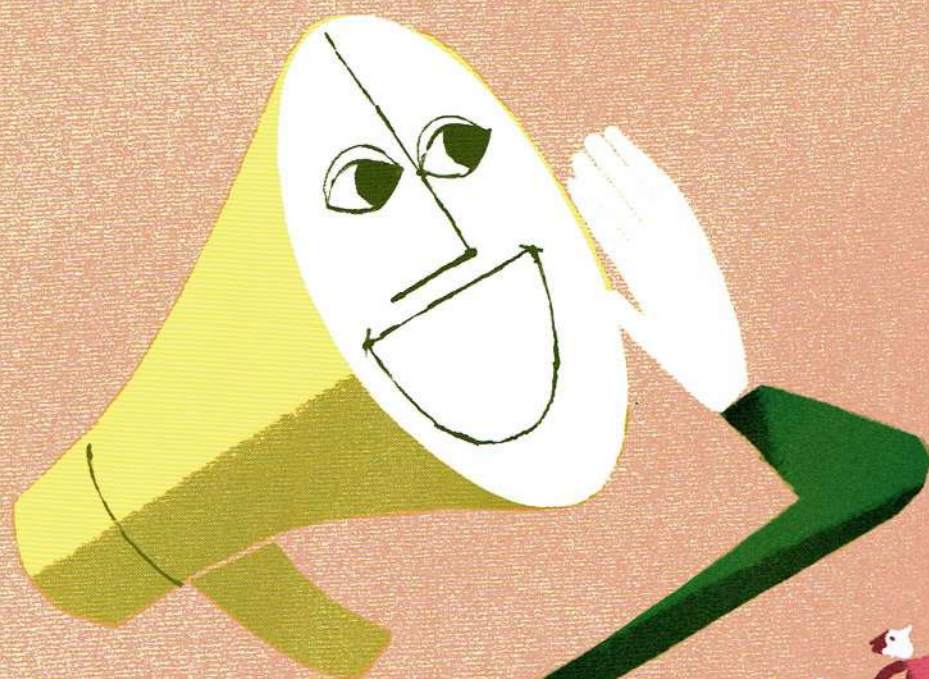


働く人の健康管理・健康づくり情報誌

へるすあっぷ21

3 2023
MARCH
No.461



特集 行動変容のエキスパートに聞く!
人が、組織が、動くツボ

わかる!身につく!健康力 不眠や不調のもと 鼻づまりを治そう

最前線レポート 「ミル・ミル・Genki」で自律的な健康づくりを支援 (株)島津製作所

けんぽREPORT 電設工業健康保険組合



NPO法人となりのかいご
代表理事 川内 潤

働く人のための 介護リテラシー向上講座

—最終回—

心得12 「親孝行の呪縛」が ヤングケアラーを生み出す

近年、ようやく「ヤングケアラー」という言葉が認知され始め、各所で支援の取り組みも始まっていますが、みなさんはご存じでしょうか。親や祖父母の介護を親に代わって担い、日常生活や学業、将来に支障を来してしまっている子どもたちをそうよんでいます。この問題で難しいのが、発見しづらいこと。子どもたちは親を助けたい一心で介護を買って出て、それを親や周囲の大人は褒め称えます。褒められるとうれしくなって、介護をがんばってしまう。周りの大人の目にも、子どもたち本人にとっても、「善」として映り、それが社会問題だとは認識しづらいのです。

2020年に行われた実態調査^{*}によると、ヤングケアラーの子どもたちがケアにかけられている時間は1日当たり中学生が平均4時間、高校生が3・8時間。この皺寄せは、宿題をしない、遅刻をする、部活を休む、疲れで授業中ぼーっとするなど、さまざまな弊害となって現れます。

しかし、教育現場ではまだまだヤングケアラーについての認識が浸透していない

め、単にサボっていると思われる叱責され、介護が理由と説明しても理解されずに子どもたちは心を閉ざし、人間不信となるケースもあります。最近ではスクールソーシャルワーカーを配置している学校も見られますが、子ども自身がヤングケアラーであると認識していなければ相談につながらないのも、この問題の難しい点です。

ヤングケアラーとなってしまう子どもたちは、将来にも大きな影を落とします。介護に追われる日々から突然介護が終わりを迎えると、自分がやりたいことが何なのかかわからず、自分で自分の道を選ぶ感覚をもつことができなくなっています。また、要介護者から感謝の言葉どころかストレスを向けられることもあります。結果、自己肯定感が下がり、人を信頼できない大人になってしまふのです。

**家族で介護を抱え込まないことで
犠牲となる子どもを減らす**

ヤングケアラーを生み出す要因のひとつ

に、日本ならではの介護に関する考え方があげられます。

NPO法人となりのかいごが行った「介護に関する意識調査」では、7割以上の人が「家族だけで介護を行うべきではない」と回答した一方で、「自分で介護すること」が親孝行になる」と答えた人が6割以上いました。これを「親孝行の呪縛」と私はよんでいます。これを「親孝行の呪縛」と私はよんでいます。この意識が意図せず介護を子どもに任せる親を生み、自ら介護を担う子どもをつくり出しています。

ヤングケアラー支援は始まりつつあるものの、併せて重要なのは、そもそもヤングケアラーを生み出さないことだと私は考えています。そのためには、「親孝行の呪縛」からの脱却が第一。この1年間の連載でお話ししてきたように、介護を家族で抱え込まないことに尽きます。介護を他人に任せることに自責の念をもつ人もいるかもしれませんが、それによって犠牲になる子どもがいることを忘れないでください。介護離職をするべきではないというお話しもしてきましたが、その穴埋めを子どもがすべきでもありません。

介護はプロに任せ、要介護者とはあくまでも家族としてのかかわりを大事にしたいだけだと思えます。

NPO法人
となりのかいご
【動画】
「小さなきっかけで
生まれる
ヤングケアラー」

